

## 促成ナスのロックウール栽培における播種期の前進化と 若苗定植による高位生産と収穫期の栄養診断技術

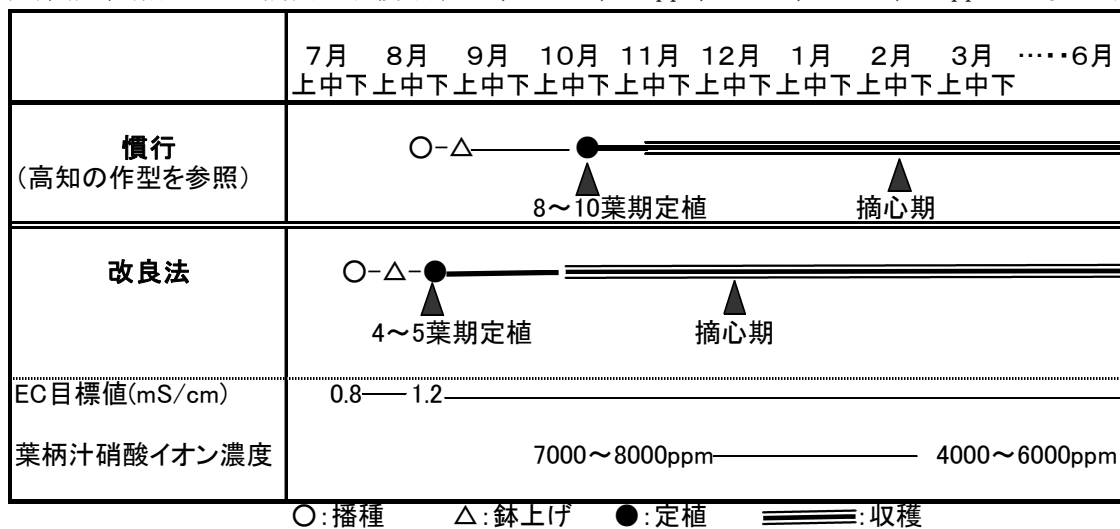
園芸試験場

### 1 取り上げた理由

宮城県内では、県北地域を中心にロックウール耕ナスの栽培面積が増加している（平成9年 0.8ha, 平成10年 1.6ha）。ナスのロックウール栽培は高知県で栽培面積が多く、促成長期どりの作型で秋から翌年夏にかけて収穫されている。県内においても高知県と同様な栽培体系がとられているが、高知と宮城では気象環境がことなるために草勢の維持が難しく、収量や品質が不安定である。そこで、本作型に適する播種期、定植時の葉数および収穫期の栄養診断技術について検討したところ、10月～4月の収量が10a 当たり 8 t という高位生産の成果が得られたので普及技術とする。

### 2 普及技術

- 1) 播種期は7月下旬，本葉4～5枚程度（育苗日数30日程度）の若苗で定植する。
- 2) 葉柄汁硝酸イオン濃度は収穫始期で7,000～8,000ppm，3月4,000～6,000ppmを目安とする。



### 3 利活用の留意点

- 1) 対象品種は「式部」である。
- 2) 定植初期は草勢が強くなりやすいので、培養液管理に留意する。
- 3) 栄養診断は果実肥大期の花房直下より発生する腋芽の第1葉を採取し、その葉柄汁中の硝酸イオン濃度をRQフレックスなどで測定する。
- 4) 培養液濃度はEC1.2mS/cm程度を基本として、上記2) 葉柄汁硝酸イオン濃度を参考にし、草勢を見ながら適宜変更する。

(問い合わせ先：園芸試験場栽培部 電話022-383-8132)

#### 4 背景となった主要な試験研究

- 1) 研究課題名及び研究期間  
高収益養液栽培技術の確立 平成11年
- 2) 参考データ

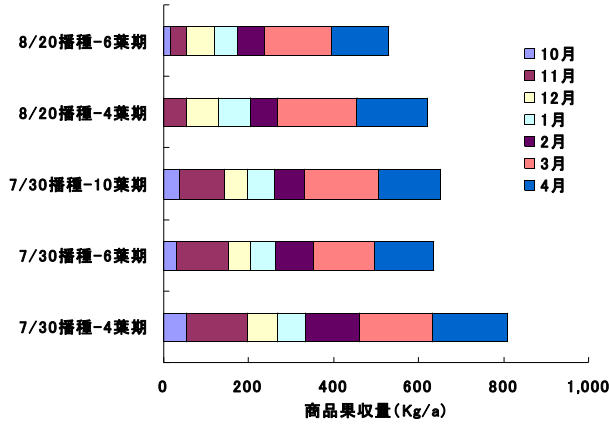


図-1 a 当たり商品果収量 (1998/10~1999/4)

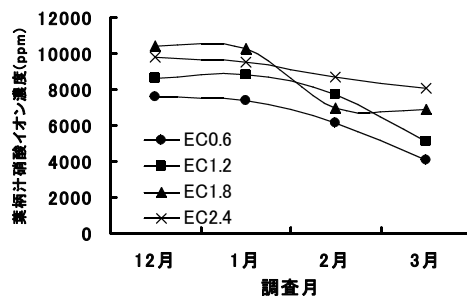


図-2 葉柄汁硝酸イオン濃度の推移 (果実肥大期の花房直下から発生する腋芽第1葉を採取)

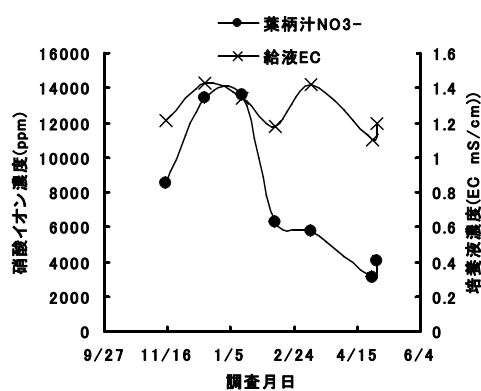


図-3 現地調査における葉柄汁硝酸イオン濃度と培養液濃度の推移 (岩出山町 0生産組合, 平成9~10年)

- 3) 発表論文等  
なし